
ヤンデレ逃避行 ~逃げた先は異世界~

桜庭 夢鬱 (元ミヤナリ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ逃避行 → 逃げた先は異世界→

【EZコード】

N5426Y

【作者名】

桜庭 豊鬱（元ミヤナリ）

【あらすじ】

運動神経だけがとりえの俺、秋田亮介は典型的なヤンデレの少女に追いかけられ、その途中で異世界へと通じるワープトンネルに入ってしまう。

抜けた先は言語も地理も分からぬ異世界のとある荒地。そこで出会った何故か言葉の通じる老人が言うには、俺はこの世界で唯一異世界トリップを行える少女の魔法によってこの世界に来てしまつたらしい。元の世界に帰るには、もう一度あの少女に会う必要があるらしい。

だが、俺は命が惜しかったので、とりあえずこの世界に住み留まることにする。そうして、俺のヤンデレ少女から逃げる日々が始まりを告げたのだった。

プロローグ

「ねえ、私のこと可愛いくて言つてくれたよね？ あれは嘘……だつたの？ まさか、あなたに限つてそんな悪趣味な嘘を吐くわけないよね？」

「お、俺が悪かった！ 許してくれえッ？」

俺は白昼の町中を包丁を持った一人の少女から逃げるために走っていた。さつきまで学校で友達と駄弁つていたにも関わらず、転校生として少女が教室に入ってきた途端に地獄の鬼ごっこは開始の合図を告げてしまった。

その少女とは、赤色という常軌を逸した髪の毛を後ろで一つに纏めている美少女だった。少し垂れ目でおつとりとした印象を与えるが、何故か五〇メートル六秒フラットの俺に涼しい顔でついてきている。それどころか、少しづつ一人の距離が短くなってきている。

「何で？ 何で私に許しを請おうとしてるのかな？ 別にこっちに来てくれれば私は何もしないんだから、ねえ早くこっちにおいでのよ」「ふざけんなッ？ 自らの命を捨てる」となんて出来るか…」

そう言いながらも、元々短距離型だった俺に長距離を全力で走るのは辛かつた。現に俺の息は少しづつ乱れていっており、彼女との距離もそろそろ埋まるとしている。しかし、ここで追い付かれたら恐らく無怪我で家に帰れる可能性は希薄となるだろう。

俺は自分の筋肉をどう痛めるかになつても、これから先は只管命を優先することを考えた。すると、少女と俺の距離はまたしても少しづつ開いていった。

「何でよ？ 何で私から逃げようとするの？ 私のことを一生愛し

てるつて言ってくれたのはあなたなのに、どうしてあなたは私が離れようとするの？」

俺は全力で走りながらも、俺が彼女に対して放った言葉がどんどん過大化されていることに驚きを隠せなかつた。そもそも、俺は彼女に対して小声で可愛いな、としか言った記憶が無い。それなのに彼女からすると、俺はいきなり自分に愛の告白をしてきたことになつてゐるそうだ。

それよりも、俺は薄々と違和感のようなものを感じていた。町中で包丁を持った少女が走っているにも関わらず、誰も驚いたり叫んだりすることがないのだ。いや、それ以前に俺が走る道には人が一人たりとも歩いていないのだ。

町はまるでゴーストタウンと化していた。それはつまり、俺のことを助けてくれる人間が一人もいないということを意味する。

「……!? うあッ！」

しかし、追い付かれなければ大丈夫という俺の考えは甘かつた。後ろから物凄い勢いでこっちに飛んできたのは、彼女が持っていた包丁だつた。その包丁はギリギリ俺の左耳の横を通過したため、怪我をすることは無かつたが、俺の全身からは冷水のような汗が噴き出されていた。

そして、事は決してそれだけでは済まなかつた。

「……し、しまつた！ 危ない！」

後ろで少女が何かを叫んでいた。しかし、俺は自分の意識を目の前だけに向けようとすると、その先には何か歪んだ空間の穴のようなものが現れていた。まるで、生き物の口の中みたいに薄いピンク色をしたそれは、SF漫画などで呼んだワープ空間などに似ていた。

いや、もしかするとワープ空間そのものではないだろうか。
どっちにしろ、俺が全力疾走をしている以上、その穴を回避する
ことは不可能なようだ。

「う、うああああああッ？」

俺は自分が出せる精一杯の声で叫んで恐怖を紛らわせながら、勢
いよくその穴の中に入っ込んでしまった。

「これじゃ、また彼を一から探さなければならないよ。でも、私た
ちの愛の絆は決して簡単に破れるものじゃないから大丈夫だよね。
だから、私のことは心配しないで待つてね」

少女は何か独り言をブツブツ呟きながら、その穴の存在に特に驚
く様子は見せず、更にはその穴の中に飛び込んだ。

第一話　「」は異世界

「…………」

俺が目を覚ますと、自分がふかふかのベッドの上に寝ていることに気づいた。それと同時に、立派な白髪を蓄えた老人が俺のことを見下ろしていることも気づいた。しかし、何故か老人の言つている言葉を理解することが出来ない。日本語とは違う、全く別の言語を使つていてるのだろうか。

「あんたは誰…………？」

「……ヌウ？ オヌシ、ニホンゴヲハナセルノカ？」

俺が日本語で問い合わせると、老人は酷く驚いたような表情を浮かべて、その後に片言の日本語で俺に問い合わせてきた。何とか言葉は通じるようだつた。

「まあ、俺は日本人すから。それで、俺は何でここにいるんだ？」
「…………」

俺は見ず知らずの老人に自分が介抱されている理由を老人に尋ねた。すると、老人は一気に表情を暗くさせて、黙り込んでしまつた。

「そういえば俺、今まで何をやつてたんだっけ…………」

木製の家の中は非常に暖かく、とても気持ち良かつたのだが、その悩みのせいで妙に落ち着くことが出来なかつた。何故か、ここに来る前、俺はとても恐ろしいものに襲われていた記憶が微かにあるのだが、それが何なのか詳しく思い出すことが出来ない。

すると老人が重たそうな口をゆっくりと開いて、俺に衝撃的な言葉を告げた。

「オヌシハ、アノイチゾクノマツエイニヨツテココニシレテコラレタ」

「一族の末裔……なんだ、それは？」

「オヌシ、ヒイロノカミヲモツタオナゴニアツタダロウ？」

「緋色の髪の女……あつ！」

そこで俺は今まで何をしていたのかをきっぱりと思い出した。出来れば思い出したくは無かつたのだが、俺は包丁を持った頭のとち狂つた少女に追いかけられていたんだ。しかし、そいつとこの地に一体、何の関係があるのだろうか。

「アノオナゴニハサマザマナセカイヲカケルチカラヲモツテイル。オヌシハソレニマキコマレタノダロウ。シンジラレヌトハオモウ。ダガ、コノサキイキティキタイナラ、ワシノイウコトヲシンジルノガイチバンダ」

片言で聽きづらい言葉ではあつたが、俺の耳にはその意味がハッキリと伝わった。つまり、俺があの時に潜つた謎の空間は、世界と世界を繋ぐトンネルのようなものだつたのだ。また、それは俺が異世界にやつてしまつた、ということも意味する。

しかし、老人の言つ事はどうしても信じ難かつた。いきなり少女に追いかけられて、命の危険を察知して、そして異世界にトリップしてきて。こんな次から次へと忙しい出来事に遭遇して、俺の脳がまだショートしないのが不思議なくらいだ。

だが、老人は俺が話信じていないことくらい分かつていたようだ。すると、彼は人差し指を上に突き出した。

いきなり何だ？ と俺は首を傾げる。その瞬間、老人の人差し指

の少し先から小さな火が出現した。俺は驚きのあまり、バツとベッドから上半身を起こした。そして、老人の細い指から為される奇跡に、俺の目はすっかり奪われていた。

「コレデスコシハシンジテクレタカノ？ イマ、ワシガヤッタノハ『マホウ』トヨバレルギジユツジヤ」

「おい……マジかよ。でも、これ手品に使うマジックフィンガージやないだろうな？」

それでも俺はまだ異世界にいることを信じることが出来なかつた。すると、老人は困ったような表情を浮かべて、今度は人差し指から吹き出すそれを火の玉状にして、空中で自由自在に操り始めた。これを見せられては、俺は老人の言葉に反駁することは出来なくなつてしまつた。

「まあ、疑つてばかりもいけないからな。少しだけは信じることとしよう。それで、元の世界に戻る方法はあるのか？」

「ヒトツダケアル。アノオナゴニタノムシカナイ」

老人は俺の質問にあっさりと答えてくれたが、その内容は俺にとって不可能なものだつた。

「え……？ あの女に頼む？」

「ソウダ。アノチカラヲツカエルノハ、イマデハアノオナゴダケ。モトノセカイニモドルニハ、アノオナゴノチカラヲツカウシカナイ」

最悪だ、と俺は無意識にも呟いていた。

俺を殺そうとした奴に、もう一回会つて元の世界に戻してくさい、と頼まなければならないのか？ それは自殺行為にも甚だしいだろう。もし、もう一度あの少女に会つて、今度こそ心臓に包丁で

も刺されたりしたらと思つと恐怖に身が震える。

「ソレガダメナラ、コノセカイデスゴスシカナイ。ワシノイエディ
イナラ、オヌシヲスマワシテモヨイ。ココテアエタノモナーカノエ
ンダ」

「まあ、そうするか。少しだけこの世界に留まって、それから先の
事は追々と決めることにする。俺だつて、命は惜しいからな……」

「ソウカ。デモ、ヒトノイエニスムナラ、ソレナリノシゴトハシテ
モラウゾ？ イイナ？」

「まあ、住まわしてもうつ身だからな。そんぐらいはお安い御用だ」

正直、これから異世界で暮らすということに不安を隠せずにはい
られなかつた。しかし、今の俺にはそれ以上に、あの少女に対する
恐怖がある。だから、俺はまずここで生活をしながら、そのうち帰
るか残るかを判断していきたいと考えた。

そして、俺の異世界ライフは幕を開けたのだつた。

第一話 訓練

俺が『リベルタス』という異世界にやつてきてから、今日で丁度一年となつた。ここで使われる言語は舌遣いが非常に難しく、ジジイの徹底指導が無かつたら村の住民と話すことなんて出来なかつただろう。ちなみにジジイというのは、俺が最初に出会つたあの老人のことだ。最初は日本語をずっと使っていなかつたため、少し片言になつていて聽こえづらかつたが、今では流暢に会話を出来るまで至つている。

また、ジジイが俺に見せてくれた魔法は、この世界で練習を詰んでマナを自由に扱えるようになつたものにしか使えないらしい。マナというのは、この世界にある靈的物質の呼称だ。地球で魔法を使つことが出来ないのは、そのマナが地球に存在しないかららしい。

しかし、俺をこの世界に引きずり込んだあの少女みたいに、地球でも魔法を使える方法があるらしい。体内にマナを吸収する方法らしいのだが、詳しいことはあまり分からない。

しかし、俺がこの一年で取り入れた情報は膨大だ。様々な食料や生活用品の相場や、この地の文化や宗教など、俺もそろそろこの世界で適応出来るようになつてきた。

ただ、まだ地球に帰るかここに残るかの判断はついていない。実は、ここで暮らしている内にこの世界も悪くないと思えてきたのだ。

「亮介、そろそろ飯にするから、狩りにでも行くか
「分かった。すぐに支度する」

この世界には魔物と呼ばれる生き物が存在する。マナを異常に吸収し過ぎて、凶暴化や巨大化、突然変異を起こした生き物のことだ。普段は山や海など人が住まない環境に棲みついているが故に縄張り意識も高く、油断をしていると喰われる危険性もある。だが、マナ

を多く含んでいるので、魔法を使う人間などにとつては魔物の肉は重宝されている。また、人間はマナに強い種族らしいので、過剰採取してもあまり心配はしなくても良いらしい。

俺はよく魔法の訓練も兼ねて、ジジイと一緒に山へ狩りに出向いている。本当は、俺は剣士になりたかったのだが、それを言つた瞬間ジジイに殴られた。奴は意地でも俺を魔法使いに育て上げるつもりらしい。

「さて、支度が済んだ。さつさと行くぞ、ジジイ」

俺は魔法力の補助を行つてくれる、地球でいう櫻の木に似た木材で作られた杖を持つて山へと歩き出した。

俺たちは村から出る。外は既に危険地帯と化しているので、油断をすると怪我をしてしまう。

「亮介、お前はまだ未熟だ。小物以外の魔物にはあまり無理してかかるなよ？」

「分かつてゐる。俺だつて命は惜しい」

この一年間、あの少女から逃げ続けてきて、俺の口癖はすっかり『命が惜しい』になつていた。よく、近所のガキに臆病亮介と言われるが、本当の事なので反論が出来ない。ちなみに、この国では名前は勿論、横文字だ。だから、亮介という名前は地域住民からよく珍しい名前と言われる。

山までは一キロくらいの道のりを歩く必要がある。それまでにいつも数匹の魔物と出会うのだが、ここら辺の魔物は初心者の旅人向けと言われるほど弱いので、相手にならないのだ。

現に向こうの方から一匹の魔物が迫ってきた。茶色の逆立つた剛毛に包まれた、凶暴な魔物だ。この周辺でもトップレベルのウルフと呼ばれる魔物だ。

俺はすかさず、杖をウルフの顔に向ける。

その瞬間、杖の先から竜のような形をした炎が放たれた。それは轟々と激しい音を立てながら、ウルフの身体を包み込んだ。数十秒もすると、ウルフの身体は完全に灰となつた。俺はそんなことなど気にせず、只管前に向かつて歩く。

ちなみに、魔法と呼ばれる技術には詠唱と呼ばれるものが必要だ。だが、その魔法を熟練すると詠唱がいらなくなつたり、または短くて済んだり、更には魔法の失敗率が少なくなつたりするのだ。

「お前も基礎的な炎魔法くらいなら詠唱しなくても意思だけで操れるようになつたのかい」

「まあ、数ヶ月掛かつたけどな」

「全くじや。ここまで物覚えの悪い人間は久しぶりじや」

ジジイは頭を軽く押さえながら、呆れ果てた目つきで俺のことを見てきた。俺は少し腹が立つたので、杖の先をジジイの顔に向けた。

「い、こらー。味方に杖を向ける阿呆が何処にいるー?」

ジジイをからかうと怒号が五月蠅いので、俺は早めに杖を下ろして再び徒步に意識を向けた。だが、結局ジジイに頭を一発殴られた。

第二話 鬼は肉食

山の入り口に着くまで、およそ二三時間のウルフを倒した。魔物は地球で言う害虫と似たような物で、この世界の生態系にも影響を与えるそうで、いくら倒そうとも咎められる事はない。それに、魔物は人を圧倒するくらい強い種族もいるので、この世界では旅人や腕自慢などの人間たちが栄えているのだ。地球だったら、いくら剣技が巧かろうと、それを生かせる場が少ないので、それが世界的に栄える事はあまりない。スポーツとして栄える事はあっても、実戦として栄える事は。

一方、この世界は地球でいうミサイルや戦車のような兵器のようなものがなく、戦争は人と人がぶつかり合う古代の戦のような形をしている。いつ、兵に駆り出されてもおかしくないので、人々は自分の魔法や剣の腕を磨く事に時間を掛けているのだ。

世界は幾つかの国に分かれていて、それら同士が戦争を行ったり、内戦が頻発に起きている。俺は今まで、戦争に呼び出されたり参加したりしたことはないが、もしここに留まるとしたら、いつか俺は自分の力を人殺しのために発揮する時がくるのだろう。

「ジジイ、今日は何を狩るんだ？」

「そうじゃな……最近ここ付近で鬼が暴れておるらしい。それを狩るとするか？」

「鬼？ そんな小動物がここで暴れてんのか？ 笑い話にしかなんねえぞ」

「馬鹿にするな。魔物と化した鬼は俊敏で常に空腹だ。笑っているうちに奴の腹に収められてしまつぞ」

俺は今まで、熊や猪や狐の魔物と戦ってきたが、鬼の魔物というのは初めてだ。ましてや、地球ではペットとして可愛がられている

あの小動物が、魔物になつたといえ凶暴になるとは思えない。

俺たちは獲物の兎を追つて、山のそいら中を歩き回る。魔物には罠という猪口才な細工は効かないことが多いので、頼りになるのは足跡やマーキングの印、臭いなどだ。

すると、道中の木の下に兎のものらしき糞のようを見つけて、丸く固まつた粒のようなものがいくつも落ちている。本当は嫌だが、少し近づいて臭いを嗅ぐと、鼻をつく臭いと共に微量のマナのニオイがした。ただ、実際にマナにニオイがあるわけではなく、人間の五感以外の感覚のよつなものがそれの存在を教えてくれるのだ。

「ここの糞からマナが出てるな、これは魔物の糞と考えていいだろ？」

「せうか、お前も微量のマナを感じ取れるよつにまで成長したんじやな」

ジジイが珍しく笑顔で俺の顔を見つめていた。何だか恥ずかしかったので、俺は見るんじやねえと自分の方から目線を逸らした。

「ここに糞があるといつ」とは、足跡もあるだろ？ 幸い、この糞はまだ古い物じゃなをせうじやし」

すると、俺たちは辺りの土を見回して、兎の足跡を探し始めた。すると、ジジイが木の糞があつた側の逆側に奥へと続いくつもの凹みを発見した。四つの点が集まつた形をしており、これは兎の足跡だと断定してもよせうだった。

「こいつは運の良い。さて、すぐに足跡を辿るぞ。わしも早く家に帰つて休みたい」

その意見には俺も賛成だつた。狩りなんて面倒くさることは早く

終わらせて、家で飯を食いたい。

足跡を辿つていいくと、奥に真っ白の塊のよつたものを発見した。二人は木陰から、その塊の様子を見る。

「あれが兎か……でか過ぎるだろ」

「確かに。山荒らしと呼ばれるだけはあるの」

普通の兎は人間の手で抱きかかえられるほど小さいが、俺たちの視線の先にいる兎は軽く見積もつただけでも一メートル近くはありそうだった。

そして、俺たちはもう一つ、その兎が今何をやつているのかを目撃してしまった。まさに、捕食というべきか。兎はここら辺でも特大級の大きさのウルフを食していた。既にウルフの半分以上は骨と化しており、食べるスピードからしても、あともう少しで胃袋に全部収まつてしまいそうだ。普段は草食の兎を肉食に変えてしまつとは、マナとは恐ろしいものだ。

「あれは、まだお前には早いかの。わしに任せておきなさい」

「ジジイ、お前こそ本当なら隠居しなきやいけねえのに、大丈夫なのかよ」

「それは余計じゃ」

ジジイは軽く俺の頭を殴ると、木陰から姿を現した。その時に地面の枝を割つてしまつたようで、ウルフを機嫌良く食べている途中だつた兎の魔物（以後、ハングリーラビットと適当に呼ばせてもらうことにする）がジジイの存在に気づいた。ハングリーラビットは自慢の牙を剥き出しにして、まるで脚をばねのように使ってジジイに飛び掛ってきた。

「ジジイ！」

「慌てるな、獣」

俺は思わず叫んでしまったが、ジジイは至って冷静だった。そして、スッと自分の右手をハングリーラビットに向ける。

次の瞬間、兎の身体が青白く輝く雷に打たれた。そして、ジジイに到達するごとなく、その巨躯はずしりと地面に落ちた。

「すげえ……」

ジジイは様々な魔法をバランス良く使える万能系の魔法使いだ。だから、一番最初に俺に見せてくれたように炎を操ったり、または雷を操つたりすることが出来る。俺は基本的に炎系の魔法しか使えないでの、俺とジジイには大きな差があるといえる。

「さあ、亮介。今日は兎の肉でも食べるか」

ジジイはブスブスと焦げている兎の身体をぽんぽんと叩きながら、俺に飯の準備をするよう促した。

第四話 ジジイの思い

俺は巨大な兎の皮を剥いだ。その巨躯には包丁を刺すだけでもそれなりの力を必要とするので、完全に身体から白色を無くすまでにはかなりの労力を必要とした。

ジジイはそんな俺の苦労を知らず、暢気に火の準備をしている。後ろから押してやりたい衝動に駆られたが必死に堪えた。

俺は兎の肉を持てる大きさに切り取る。ジジイは熟れた手つきでとつくに火を点け終っていた。俺は持っていた肉をジジイに手渡す。ジジイは予め持っていた棒で肉を突き刺すと、火の横に垂直に刺さっている、先が二股に分かれた一本の棒の上に置いた。

少し待つていると、肉が焼けたようで、ジジイは俺にそれを渡してくれた。俺は誘惑に負けて、その肉にかじり付いた。臭みというか独特的の臭いが気になるし、パサパサして硬い肉だったが、量だけは腐るほどあるので腹は次第に膨れていった。

しかし、元は一メートルもあつた兎だ。それを完食するなんて不可能に決まっている。

「まだ相当残っているが、どうする？」
『はい、私にもください！』

俺がジジイに尋ねると、その返答はジジイがいる場所とは逆側から聞こえてきた。しかも、その鈴を鳴らしたような声には、何処か聞き覚えがあつた。

そして、急に俺の額から滝のような汗が噴き出ってきた。そう、その声の主は俺がここに来る理由を作つたあの少女のものだった。

「お久しぶりだね、亮介君！ 私、一年間も色々な所を回つて探しんだよ？ 亮介君も一年間、私に会いたくて仕方が無かつたよね

? 「でも、今日からはこの世界でゆっくりと私たち一人で暮らすことが出来るね！」

「お? お主はあの女の孫じやないか」

俺はトライウマの元凶に運悪くも再開してしまい、気絶する寸前にまで陥つた。一方ではジジイが目を細めて、少女のことを眺めている。そういえば、ジジイはあの女のことを知っているのだった。

少女はジジイの顔を見るなり、不思議そうに首を傾げる。

「あら? 私の祖母のことを知ってるの?」

「知ってるも何も、わしをこの世界に引きずり込んだ本人じや」

ジジイは俺に会つた当時から日本語を喋ることが出来た。それはつまり、彼が俺と同じく地球からやってきたことを意味している。本人から直に聞いた事は無かつたが、薄々勘付いてはいた。

「まあ、あなたも亮介君と同じく地球からやつてきたと? それはそれは、私の祖母がとんだ粗相を……」

「もう、何十年前の話じや、今更気にしちゃいらん。それにあいつはわしを守つて死んだ。怨んだりなんてしておらんよ。それに亮介、お前にそ決断しなきゃいけないんじゃないじゃないか?」

「え……俺……?」

俺はジジイに突然振られたので、どう言葉を発すればいいのか分からなくなつていた。すると、少女が何処か申し訳なさそうな顔をして、俺たちに告げた。

「実は、今すぐにあなたたちを地球に戻すことは出来ないんです」「…………どうこう」とじゅ

少女が言った言葉は、俺たちにとつて衝撃的なものだつた。俺はジジイがいきなりキレ出すのではないかと心配したが、それは杞憂に終わった。ジジイは少し悲しげな顔をしただけで、少女に何も言う事はなかつた。

「さつきも言った通り、わしはお主らのことを怨んではおらん。寧ろ、この世界で生涯を終えるつもりだったから、丁度良いくらいじや。ただ、聞かせてくれ、元の世界に戻すことは出来ないというのはどういうことじや？」

「この世界には規格外のマナを吸収したが故に化物に成長した人間がいます。私はそれを魔王と呼んでいます」

「魔王……確かに、普通なら死んでもおかしくない量のマナを取り入れて、姿形から思想まで何もかも変わってしまった悲惨な人間がいると聞いたことがある」

「私の能力は、その魔王に奪われてしましました。彼自信、その力を悪用する気は無いらしいのですが、あなたが元の世界に戻るには魔王から再び力を取り戻す必要があります」

つまり、少女は自分が持つている力を魔王と呼ばれるものに奪われてしまい、今は世界と世界を駆けることが出来ないのだとう。俺はそこで、我慢出来ずに少女に尋ねた。

「じゃあ、魔王を倒せば俺を元の世界に戻してくれるというのか？」
「当たり前じやない、私の亮介君の頼みなら聞かないわけにはいかないわ」

少女の対応は、ジジイの時のそれとは笑つてしまふくらい違かつた。だが、俺は決して表情を緩ませることなく、睨むような目つきで彼女に再び尋ねる。

「じゃあ、魔王を倒したら、ジジイを元の世界に戻してくれるんだな？」

「……亮介？ 何を言つておる？」

「ジジイ、隠し事なんて俺に通用すると想つたじゃねえよ。本当は自分の生まれ育つた故郷の土をもう一度踏みたいと考えてるくせに、その思いを簡単に捨てようとしてんじゃねえ」

ハッキリ言つて、少女に襲われるのが嫌だからこの世界で一年間も暮らしていた俺の言える言葉ではないが、俺はジジイが毎日夜に元の世界の様子が写つた写真を眺めていたのを知つていた。だから、ジジイが本当は元の世界に帰りたいと考えていることも知つている。

「せうか。お前には隠し事は通用しなかつたか。でもな、魔王は噂によると、周辺の魔物を操ることが出来るらしい。そんな力を持っている化物に、ただの人間であるわしらが太刀打ち出来る筈が無い。わしは、何よりも命を犠牲にしてまで、わしのことを守つてくれたあの女のためにも、命を無駄にするわけにはいかんのじや」

「だったら、俺が魔王を倒しに行くよ」

ほとんど感情に任せて、俺はとんでもないことを口走らせていた。だが、この言葉は俺の素直な気持ちだ。一年間も俺に寝る場所を与えてくれて、一年間も俺に魔法を教えてくれて、一年間も俺の親のように接してくれたジジイに、俺は一度だけでも恩返しをしたかった。

「無茶を言つな。お前はまだ、魔法も知識も未熟じや。今、魔王の所に行つたところで消し炭にされるだけじや」

「でも……」

「亮介、お前は元の世界に戻りたいと願うか？」

「……いや、ここはとても良い世界だ。ここでなら、俺も毎日

を楽しく過ごせていけると思つ」

「なら、いいじゃないか。お前はむづわしの子供みたいなものじゃ。
いつまでも、あの家でゆつくりと暮らすのが一番じゃ

ジジイは俺に微笑み掛けてくれた。俺は何処か腑に落ちない部分
もあつたが、ジジイの思ひに押されてゆつくりと頷くしかなかつた。

「明日まで待ちます。答えが決まつたら、ここに来てください。今
すぐにも亮介君に抱きつきたい気分ですが、今日くらいは我慢す
るにじこします。さて、私は兎でも食べますか」

少女はそう言つと、俺たちが残した兎肉を食べ始めた。ジジイは
俺の背中をポンと押して、俺はそれに促されるよつて家へと向かつ
て歩き始めた。

第五話 旅立ち

「亮介、この世界は本当に良い世界か?」

「どうした?まあ、人と話してると温かい時もあるし、周りが自然ばかりで良い景色も見られるし、とても良い所だと思うぜ」

「じゃあ、魔王の所に行くなんて絶対に言うんじゃないぞ。お前もよく命が惜しいと言つているじゃないか。その通りじゃよ、命は大切なものだから、無茶をしてせっかく親から貰つたものを無駄にしてはならんのじゃよ」

「……そうか

俺はジジイと一人で並んで歩いていた。普段は俺が先を歩いていたり、ジジイが準備に遅い俺を見捨てて先に言つたりしてて、今みたいに横に並んで歩くことなんて滅多になかった。俺は、初めてジジイに心から感謝をした。

「ジジイ、サンキューな

「お前こそなんじゃ。いきなり気持ち悪い

辺りは夜の帳が下りて、すっかりと暗くなっていた。その中を、俺たちはまるで本物の親子のように、笑いあいながら歩くのだった。

* * *

日付が変わった。

外はもう何も見ることが出来ないくらい暗くなっている。俺は今、トイレの窓から外の様子を眺めている。

「リリに来て、もう一年になったのか……

約一年前の朝、俺はいつも通りに高校に通つて、転校生の女の子が来るつて聞いて喜んでいた。そして、その転校生を見て俺は飛び上がつた。その少女があまりにも可愛かつたからだ。

俺は初対面の相手に対しても普通に話しかけられる人間だったので、たまたま横を通りかかったその女の子に可愛いね、と言つてしまつたばかりに、俺は少女から追いかけられる破目になる。

そしたら、少女はいきなり結婚だの恋人だの言い始めたので、俺は少し少女から遠ざかると、彼女はいきなり包丁を手に持つたのだ。そんな頭のいかれた女に出会つたら、もう逃げるしかないだろう。

「そして、俺はここに来てしまつたのか」

今思えば、俺はなんて間抜けな異世界トリップをしてしまつたのだろうか。女の子に追いかけられて、そしたら田の前にいきなりトンネルが現れて、勢いを止められずに突っ込んでしまうなんて。

でも、そのお陰で俺はジジイに出会うことも出来た。少し複雑な気持ちもあるが、そうポジティブに取つていいくのが一番だろう。

「でも、今日でお別れか」

俺は窓を閉めると、トイレから出て寝室に向かう。その時、俺の右手には一枚の紙が握られていた。これは、俺がジジイに向けて書いた置手紙だ。

やつぱり、俺は魔王を倒すことに決めた。あの時、俺が覗くようになつたジジイの写真。そこには富士山や秋の京都など様々な景色が写つていたが、その写真のどれにも可愛い女の子と綺麗な女性と若い頃のジジイの姿が写つていた。あの二人は恐らく、ジジイの娘と妻だろう。

さつきジジイは俺に、お前はわしの子供のようなものだ、と云え

てくれたが本当にジジイがそう思つてゐるのか、と考えたら多分違うのだろう。ジジイには家族がいる。本当の家族は決して俺ではない。

「ジジイ……一年間ありがとな」

寝室に入ると、ジジイはベッドの上で気持ちよさそうに寝ていた。俺は、そんなジジイの寝ている枕の横にそっと手紙を置いた。

そして、これ以上ここにいても悲しくなるだけなので、さっさと杖や他の必要な道具を纏めると、俺は一年間暮らした家を後にした。夜の道は暗く危ない。俺は杖の先から炎を出して、それを松明代わりにした。

さつきも通つた道を俺は一人で歩く。やはり、夜の暗い中で炎を使うのは、魔物に見つかりやすいらしく、ウルフなどが何度も襲いかかってきたが、俺はその度にそれを消し炭にした。

そして、俺は山の入り口に辿り着いた。すると、そこにあの少女が立つっていた。

「あ、亮介君。随分と早かつたんだね、それじゃ答えを聞かせてもらおうか」

「……俺は、魔王を倒して君の力を取り戻させる」

「そう。それが、あなたの考えだというなら、私はあなたの考えについていくまでだわ。今回は私に落ち度があるわけだし、私もあなたについていくわ」

「お前、意外と良い奴なんだな」

俺が少女に向かつてそう言つと、彼女は爆発したかのようにいきなり顔を真つ赤に染めた。俺はそんな彼女の恥ずかしがる表情を見て、不覚ながらも可愛いと思つた。当たり前だが、声に出すような馬鹿なことはしない。

「……私の名前はセレナ、セレナ・テムラス。よろしくね、亮介君」「ああ、よろしくな、セレナ」

俺はセレナに握手しようと手を差し伸べようとしましたといひで、やっぱり手を引っ込めた。ここで誤解されると面倒くさいことになると思ったからだ。

しかし、俺が手を引っ込めようとした瞬間に、セレナに手を握られた。俺はあまりの速さにビックリと身を震わせた。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、あまり私を嫉妬させるようなことはしないでね。……殺しちゃうかも知れないから

「…………え？」

セレナは思い出したように言つと、何処から出したのか彼女の握手していない方の手には包丁が握られていた。その瞬間、俺の顔から血の気が引いた。

俺はセレナの手を乱暴に振り払つと、一人で逃げ出すように走り始めた。

「え？ 何処にいくの、亮介君？ 何で、何でまた私から逃げるのかな？」

「げつ！？ 追いかけてきた、ヤバい！」

結局、セレナは一年前と同じで、俺を包丁で追いかけまわしていく危ない女だった。俺は目に涙を浮かべながら、夜の道を全力で走るのだった。

第六話 依頼受理

一年前の時より、俺は運動能力が向上したらしく、何とかセレナを撒くことに成功した。杖やポーチなど荷物を持っていたにも関わらず、追い付かれなかつたのにはやはり口ごもるの訓練の成果もあるのだろう。

そして、俺は気がつくと来たことのない街に辿り着いていた。どうやら、俺は闇雲に走っているうちに山を越えてしまつたようだ。辺りの地形はおろか、この街に着くまでに見掛けた魔物まで村の辺にいたものとは異形の姿を持つていた。

「とりあえず、宿を探してみるか」

俺は知らない街の中を歩き回つて宿を探すこととした。周りの建物は煉瓦などで造られたものが多く、殆どが木で組み立てられる村の家とは別格だ。そして、夜にも関わらず灯りで街はそこそこ明るい。更に旅人なのか、剣や杖を持った人がそこらを歩いている。どうやら、旅人の街としても栄えているようだ。

「金は少ないし……安い場所探さないと駄目だな」

家を勝手に抜け出してきた身なので、有り金は非常に少なかつた。周りの魔物を狩つて毛皮でも売れば、そこそこの金にはなるのだが、如何せんさつきまでセレナと恐怖の鬼ごっこをやつていたので、そんな余裕は蟻ほどもなかつた。

俺は街の中を歩き回り、只管破屋のような宿を探した。それでもしないと、俺の持つている金じや泊まれそうにない。だからといって、野宿をするほどの準備はしていない。

「仕方が無い……ギルドや働き場のよつたな場所を探すか」

「この世界は魔物がうろついているため、何らかの事故や事件が起きることも少なくない。また、魔物の素材は価値があり、それを剥ぎ取れば金になる。そのため、魔物を討伐してほしいと願う人はこの世界にたくさんいる。それらの願いが依頼として集まるのがギルドだ。

そのギルドには、多くの旅人やそれを専門とした強者がいる。中には様々な二つ名をつけられ、注目される人間もいるし、影でこそこそと依頼をこなす人間もいる。どっちにしろ、ギルドでは強い人間がどんどん金を稼げる仕組みになっているのだ。

多くの仕事は魔物の討伐なので、良い修行にもなるだろうし、ちゃんと依頼を遂行すれば金も稼ぐことが出来る。いつか、旅人として修行することになつたら、行こうと思っていた場所でもあつたし、俺にとってギルドという存在は非常に丁度良い場所だ。

「それじゃ、ギルドに向かうとするか

俺は街の地図を見ながら、ギルドへと足を進めた。

道の端に佇む広告看板にもギルド関連の内容は多いようだ。ちなみに、俺が見た看板にはギルド直線五〇〇メートルの文字があった。そこまで離れていいようなので、俺は道の真ん中を疾走した。

一、二分で俺はギルドの入り口に辿り着いた。ギルドは地下にあるようで、そのギルドがある建物の一角に地下へと繋がる階段があつた。滑り落ちないように気をつけながら、俺はその階段をゆっくり下っていく。

「すげえ……ここがギルドか」

入り口を潜ると、そこはまだ深夜なのにも関わらず多くの人で賑

わっていた。受付で依頼を任せた綺麗なお姉さん、それを受理する厳つい男たち、または報酬が少ないと騒ぎ立てるチンピラなど様々な人たちがいる。

「はあい、ハンターたちのギルド、ケントウルム支部へようこそ。このギルドに来るのは初めてですか？」

一きなり入り口付近にいたスタッフに話しかけられて、俺は動搖してしまった。どうやら、一年間も目を惹くような美しい女性（セレナは除く）を見ていなかつたので、少し女性に対する免疫というのが薄れてしまっていたようだ。

「は、はあ……ここに来るのは初めてです」

俺は少し低姿勢になりながら返事をする。スタッフの女性はふふと微笑みをこぼりに向けると、俺に後ろをついてくるよつまつてきた。

「さあ、初めての方にはギルドについて説明を受けてもらいます。まずは、ギルドの概要について説明します。ギルドとは、人探しや護衛、魔物の討伐などの依頼を受理することが出来る施設の総称です。ここで様々な依頼をこなして名を上げるのもよし、またはたくさんの依頼を遂行してお金をがっぽり稼ぐのもよしです」

「あ、あの……ギルドのことは大抵知ってるんで、説明はいいです」

俺はこれから長くなりそうな女性の説明を優しく遠慮した。すると、女性の口元から僅かにチッという音が聞こえると共に何処かへ行ってしまった。

「舌打ちするなら聞こえなにようにしてくれよ……」

多少、舌打ちの件は気になつたが、気にしてもらひようもない
ので、さっさと受付に行って依頼を受けることにした。

受付には数人の若い女性たちがハンターたちに依頼を紹介して
いた。俺もそこから空いているところを探して、依頼を紹介するよう
頼んだ。

「ここはハンターたちのギルド、ケントウルム支部です。何か依頼
をお探しですか？」

「はい。なるべく難易度の低い魔物討伐の依頼をお願いします」

「承知いたしました。少々お待ちください」

女性は受付台の下から、膨大な量の書類を出した。その中から数
枚を選んで、俺に見せてくれた。

「まずは、この街の周辺に群れを作っているウルフの討伐依頼です
「ウルフか……流石に見飽きたな。次の依頼は？」

「次の依頼は、街から北西の位置にある洞窟に住み着くリザードマ
ンの討伐依頼です」

女性はざつと固まつた営業スマイルのまま、俺にその依頼を紹介
してくれた。リザードマンは、蜥蜴と人間を足して二で割ったよう
な姿を持っている魔物だ。攻撃的な性格のため、下手に刺激すると
怒り狂ってしまうので厄介だ。まだ、出会った事はないが、ジジイ
から危険な生き物だと教えられたことがある。

「その依頼について詳しく教えてください」

「この依頼は洞窟を縄張りにするリザードマンを一体討伐する依頼
です。手負いのため、難易度は低めです。依頼主は、ここに表記さ
れている住所にいるロマーネさんです。報酬は五五〇〇オーラム、

契約金は一〇〇オーラムです

「あ、じゃあそれでお願いします」

俺はリザードマン討伐の依頼を受理する事に決めた。ちなみに、オーラムとはこの世界で流通されている通貨の名前だ。基本的にこの世界には紙幣というものは存在せず、全てが硬貨なため大金を持っている人はとても重く感じるそうだ。

「それでは、まずは依頼主のもとに向かって詳しい説明を聞いてください。そして、この契約書をお渡し致しますので、仕事終了後に依頼主から印をもらってください。そして、印を貰った契約書を見せてくれれば、依頼は無事に遂行されたと認められます。それでは、契約金の一〇〇オーラムをお支払いください」

「分かりました」

俺はそうじつて、ボロボロの布で出来た財布から一〇〇オーラムを取り出し、それを受付に渡した。代わりに俺は受付から一枚の契約書を貰つた。

「それでは、安全には気をつけて、いつらつしゃいませ

受付は決して営業スマイルを崩すことなく、最後に軽く一礼をした。俺は契約書を無くさないように折つてポケットにしまって、このギルドを後にした。

第七話 邂逅

俺はすぐに依頼主のもとへ向かおうと考えたが、外はまだ深夜であることを忘れていて、流石に迷惑がかかるだろうとの考慮の末、明け方に動きを開始することにした。それまでは荷物もまだ少ないので宿はとりあえず諦めて、そこらの公園で休憩を取りたいと思う。そして、俺はすぐさまギルドに一番近い公園に足を運んだ。公園といつても、本当はただの空き地みたいな場所だ。この世界にはアトラクションとか遊具という言葉は存在しないようだ。文化レベルも地球より低いので、テレビもなければパソコンもない。情報を伝えるのは、新聞や掲示板に限られる。ただ、最近では電波を利用した技術が開発されようとしているらしい。近い将来、この世界にもラジオに近い存在が出来るだろう。

話は大きく逸れたが、俺は公園の一角にベンチを発見すると、ラッキーと呟いてそこに横たわった。今までずっと走ってたり立つてたりしていたので、そろそろ自分の脚が悲鳴を上げている。休ませて上げないといつか筋肉が壊れてしまいそうだ。

「ふあ、疲れた」

俺はベンチの上で寝ながら、真っ暗な夜空を見上げた。俺はそこで気づいた。この世界は、地球と違つて都会でも星がよく見えるのだ。オリオン座とか夏の大三角形とか地球と同じ星座を見る出来ないが、それでも満天の星空を眺めているだけで心が澄んでいく気がした。紺色のシートに無数に張り付くシールのようなそれは、俺を再びこの世界も悪くないと思わせる要因にもなった。

「星は綺麗ですか？ 旅人さん」

突然、横から女性と思われる人に声をかけられた。俺は上半身を起こして、その人間の顔を確認する。しかし、それは全く見覚えの無い女性だった。夜空と同じ紺色の髪の毛を肩に触れるか否かの長さまで伸びしていて、目がちょっと大きいくらいことしか、この暗さでは確認することが出来ないが、俺にそんな知り合いがいた覚えは無い。

すると、その女性がいきなり微笑みだした。そして、俺に言つ。

「いきなり、すみません。あまりに気持ち良さそうに星を見ていたものだから、ついつい声を掛けてしまいました」

「それくらい、別にいいけど……」

俺は後ろ髪を搔き鳶りながら返す。だが、女性は何も言おうとせず、俺たちの間に不自然な沈黙が生まれる。

それでも、一分くらいすると、女性の方から沈黙を破ってくれた。

「『めんなさい。いきなり声を掛けたおいて、こんな沈黙を作つてしまつて……』

「だから、別にいいよ。星が綺麗なら、アンタもここで眺めてればいい」

「そうですか、ありがとうございます」

すると、俺たちの間に再び沈黙が生まれた。でも、今回は一人とも星を眺めているだけなので、不自然さというか妙な気まずさは無かった。

「うわあ、本当に綺麗です……」

その女性は立つたまま、夜空の星々を眺めていた。その体勢を維持していれば、何時か首を痛めてしまうだろう。しかし、本人は目

を奪われて、そんなこと気にしないようなので、俺は黙つておくことにした。

「でも、何だか寂しいです
「……何がだ？」

俺は女性にその言葉の意味を尋ねていた。特に興味があつたわけではないが、そこは空気を読んだ結果だ。

「たくさん星が浮いているのに、足りないんです。ここは、私の故郷とは離れた場所なんで……」

「そうか……、でも、それは俺も一緒に」

「あなたは旅人ですよね？　何処の町からいらっしゃったんですね？」

「ブリーマ村っていう田舎からだ」

俺が淡々とした口調で答えると、女性はそうですか……、と物悲しげに呟いた。俺は流石に気になつたので、その女性に故郷のことを見ねた。

「アンタの故郷は何処なんだ？」

「私の故郷は……とにかく離れたところです。言葉も違つて、文化も生活環境も違つて、見える星すら違う所です」

「そうか、それでも言葉が違うところは珍しいな。ここは古代言語を除いたら、基本的には世界共通の言語が使われているはずなのだが……。それに、見える星が違う……見る星が違う？」

俺は見える星が違う、といつ言葉を一度言つた後、少し違和感というかデジヤブを感じてもう一度繰り返して言つた。
俺は勢いのままに彼女に質問を投げかけていた。

「アンタ、見える星が違うってどういうことだ！？ 詳しく聞かせてくれ！」

「え！ あ、はい……。私の故郷には色々な星座がありました。射手座というもののとか蟹座というものとかオリオン座というものとか、それはそれは様々な種類のものがありました。でも、ここから見える星座は私の故郷から見える星座とはみんな形が違うんです」

俺は目を見開きながら絶句した。彼女が挙げた星座の名前、全てが地球から見える星座の名前と一緒に言った。そして、それはつまり俺とその女性が同じ場所からここにやってきた、ということになる。

「アンタ……地球からやつてきたのか？」

「……え？ 何で、地球のことを……まさか、あなたも……！？」

俺たちは互いの目を見つめながら、言葉を失う破灭となつた。

これは運の良いことなのか、それとも運の悪いことなのか。どちらにしろ、奇跡と呼んでもおかしくない、二人の地球人が邂逅した瞬間だった。

第八話 同行

「それじゃあ、あなたも次元の旅人によつてここへ……？」

女性は真つ直ぐと俺の目を見つめながら尋ねてきた。

次元の旅人というものがどういうものなのかは知らないが、言葉の意味から察するにセレナのことを指しているのだろう。

俺はまず、脳の中に入ってきた情報を整理することにした。

セレナ、またはその一族によつて、この世界に連れてこられたのは俺とジジイとその女性ということが現在分かっている。もしかしたら、他にも地球からここに来た人がいるかもしれない。

「そうだ。俺はセレナという女に追いかけられている途中、勢いでワープトンネルに入つてしまつた。もう一年前の話になる」

「一年前ですか……。私は三年前に、がつしりとした体格の男の人にはここへ連れてこられました。でも、私がここに運ばれた理由は今でも分かつていません。どうやら、次元の旅人一族は、二年前にそのセレナという少女を残して滅亡してしまつたそうです」

女性は困り果てた表情で言つた。だが俺は、その情報のことを一年前にもジジイから聞かされていたので知つていた。しかし、何故滅亡したのか、という原因はジジイにも分からなかつたそうだ。

「私は、少しでも早く元の世界に戻りたいです。もし、セレナという少女の居場所を知つているなら、この私に教えてくれませんか？」

女性は決して逸れない視線を俺に向けたまま、更に少しずつ顔を近づけてくる。しかし、俺はセレナに会つても意味は無い、と首をゆっくりと横に振つた。

「セレナは魔王という存在に、世界と世界を駆ける力を奪われてしまつたそうだ。その魔王を倒さなければ、彼女に力が戻つてくることはない」

「魔王……マナを過剰攝取した人間の末路ですか。ハツキリ言つて、人間の力じゃ勝てる気がしないです」

「でも、俺は魔王を倒すため、こうして旅に出ているんだ」

俺が大事そうに櫻似の木材で造られた杖を両手で持つ。女性は、そんな俺の言葉を聞いて、酷く驚いたような表情を浮かべた。

「魔王を……倒す？　あなたは、本当にそんなことを考えているのですか？」

「勿論だ。これは、言葉も地理も分からぬ俺を一年間も養つてくれた人にに対する恩返しでもあるんだ。だから、俺は今は弱くても、除々に力を強化していくって、最終的には魔王を倒せるようになるまで頑張るつもりだ」

「言葉なら、いくらでも言えます。ただ、私はあなたの思いを行動で見せてほしいのです」

まるで粉のように散らばつて見える星空の下、彼女の表情が一瞬だけ輝いたような気がした。そして、彼女は腰に携えていた鞘から剣を抜いた。それは、微妙な反りが禍々しさを放つ、日本刀に近い刀だった。どうやら、彼女は素早い動きと冷静な洞察力を必要とする剣士であるようだ。

そして、彼女はその刀の鎧^{きつさき}を俺に向けて言った。

「私もその旅に同行させてください。剣士としての技量はまだまだ未熟ですが、あなたの話を聞いて、私も魔王を倒したいという気持ちが芽生えました」

「それは本当か？ もし、本当なら歓迎だ。同じ地球人だから信頼出来るし、人数は多い方が何かと困ることも少ないだろう」「そうですか、ありがとうございます。私の名前は夕暮鈴刃と申します。あなたの名前を聞かせてもらつてもいいですか？」

「俺の名前は秋田亮介だ。呼ぶときは何でも構わない。これからよろしくな」

仲間が増えた事に安心感を得られたのか、俺は満面の笑顔で答えた。すると、鈴刃は右手で軽く口元を押さえながら静かに笑みを浮かべた。彼女の顔つきから察するに、年は俺と一緒にくらいの筈なのだが、その仕草は妙に大人っぽく感じられた。

「そういうえば、ギルドでリザードマンの討伐依頼を頼まれたんだ。

一緒に行くか？」

「当たり前です。まずは、私の刀の切れ味を、あなたに知つてもらいたいと思います」

鈴刃は自分の刀の刃を満足そうに眺めると、それを鞘に戻した。そして、俺たちは朝の六時にこの場所で待ち合わせすることに決めた。

第九話 依頼主

日は昇り、街が起き始めた。昨日の夜ですら人の多い街であったことは確かだが、夜が明けたと同時にその数倍にも及ぶ人たちで街は活気付いた。

俺はさつきまで空き地のベンチに横たわって、数時間ではあったが睡眠を取っていた。だが、待ち合わせ時間になつたと同時に、俺は鈴刃に優しく起こされた。その時、俺は寝ぼけていたようで、欠伸をしたら目の前に美少女がいたので、驚いてベンチから落ちそうになつた。

「さあ、今日は初依頼の日ですね。少しでも早く魔王の力に対抗出来るように、頑張っていきましょう」

「そうだな。獲物はどうやら手負いのようだが、決して油断せずに行こう。ただ、俺はリザードマンについての知識に乏しい。何か、その魔物について情報などは知ってるか？」

俺はまだ見たことの無い魔物の情報を得るため、鈴刃に尋ねてみた。鈴刃は少しばかり斜め上の方に向く視線を向けた。そして、頭の中の整理がついたのか、右手の人差し指を立てながら、リザードマンの情報を話し始めた。

「リザードマンは知つての通り、緑色の皮膚を持つた蜥蜴型の魔物です。元から攻撃力が高いうえ、知性も備わっているので、旅人から奪つた剣や盾などを使用するときがあります。また、緑色の鱗は数多の魔法を弾き、数多の剣を折るほど硬いと言われています。そのため、弱点である心臓の周辺を狙つて攻撃するしかないようです。といっても、リザードマンはレベルの低い魔法や剣くらいしか防げないので心配は無用です。今のは、ちょっとした伝承での話なので」

「そうか、詳しい説明ありがとな」

「いえ、感謝されるほどのことはしてませんよ。それより、なるべく早く依頼主さんのもとへ向かいましょっ」

俺は鈴刃に促されるまま、契約書に記載されていた住所へ向かった。

だが、距離的にはそこまで離れてもいいので、記載された住居にはすぐに着いた。俺は早速、その家の扉をノックしてみた。すると、中から痩せこけた体格のおじさんが現れた。そのおじさんは、俺たちを見て依頼を受けてくれた人間であることを確認すると、家中へ招き入れてくれた。

「あなた達が依頼を受けてくれた人ですか、今回は本当にありがとうございます。そして、すぐに本題に入らせてもらいます。街から北西にとある洞窟があるのですが、その近くに私が所有する畠があります。しかし、リザードマンが洞窟に住み着いてしまったので、迂闊に畠に近寄ることも出来なくなってしまい、また畠を無残にも荒らされてしましました。前に一度、この依頼を別のハンターさんに頼んだのですが、大怪我を負つて返つてきました。その時に、右腕を切断することが出来たらしいのですが、それが原因で更に暴れるようになつてしましました」

「それはお気の毒としか言ひようがありませんね。それで、暴れ狂つたりザードマンを止めるべく、俺たちに洞窟へ向かつてほしいということですね？」

「はい、その通りです。報酬はそれなりに弾んだつもりなので、よろしくお願ひします」

俺は出されたお茶を飲み干すと、早速洞窟へ行く準備を始めた。依頼主のおじさんは何度も礼をしながら、俺たちを送り出してくれた。

そして、俺は街の出入り口である門がある北の方向に向かった。目的の洞窟へ向かうには、その門を潜り抜けて少し歩けばいいので、障害物になるような山や森などはない。

「リザードマンの討伐なんて、緊張しますね」

「まあ、俺も初めてだからな。少しばかり緊張している」

街の大通りを歩きながら、俺と鈴刃は獲物のリザードマンについて話す。まだ手負いだからマシなもの、かなり凶暴で強い魔物らしい。どうも、爬虫類というとドラゴンや恐竜を想像してしまう俺には、リザードマンという敵は少し恐怖の対象でもある。

空はまだ日が昇ったばかりだ。俺はその輝く太陽を、手で軽く目を覆いながら見つめた。そして、それと同時に俺の腹の虫が悲鳴を上げた。

「……まだご飯を食べていなかつたのですか？」

「完全に忘れてた……」

俺が腹を擦りながら言つと、鈴刃は呆れたような顔をした。だが、すぐに笑みを浮かべて、俺にご飯を食べにいこうと提案してくれた。

「すまないな」

「いいですよ。腹が減つては戦が出来ぬとはよく言つ諺でしょう？ 丁度、良い店を知つてますから、付いてきてください」

すると鈴刃が俺の前に出て、その店へと誘導するために歩き出した。俺はその後ろを、自分は情けないと想いながら歩くのだった。

第十話 赤髪タトゥー

鈴刃の案内で着いた先は、アンティークな外装の店だった。俺はその店の前に立つと、顔が青褪めていくのが感じ取れた。理由は至極単純、金が足りなさそだからだ。その外装を見ても、非常に高そうな店なのだ。破屋のような宿屋しか探せないような俺が、こんな店で物を吃えるわけがない。

しかし、鈴刃が俺の心情を無視するかのように、さっさと店の中に入つていった。ここでずっと待つてゐるわけにもいかないので、俺はしうがなく中に入る事にする。

「いらっしゃいませ……ああ、鈴刃ちゃん」

「こなんにちば、アレンさん。朝早くからじき苦勞様です」

中に入ると、何と俺や鈴刃と同じくらいの年であろう少年がいた。赤く逆立つた髪型、耳には髑髏のピアス、そして腕には矢の形をしたタトゥーが見られた。顔だけに関しては、軟弱そうで氣弱そうな顔つきをしているのに、格好に関しては厳ついの何。

俺はその少年の姿を見るなり、絶句を余儀なくされた。何が良くてあんな恰好をしているのか、俺には到底理解出来ない。すると少年は後ろにいた俺の存在に気づいたようだ。

「あ、いらっしゃいませ！」

少年は恰好の割りに、爽やかな笑顔で俺を迎えてくれた。

店内はそこまで広くなく、テーブルも三台しか見られない。更に、人も全くおらず、あまり出入りはよくなさそうだった。

「このは私の仲間の秋田亮介さんです」

「……仲間？」

しかし、さつきまでの笑顔は何処に消えたのやら。鈴刃が俺を紹介すると同時に、少年がいきなり睨むような目で俺を見つめてきた。しかし、元は軟弱そうな顔つきをしているせいか、怖いと感じることは全く無かつた。しかし、理由は何にしろ少年が怒っているのは明瞭なので、あまり刺激しないように注意を払つことにした。

「あなたは一体、鈴刃ちゃんの何なのでしょうか？」

「何なのと言われても……昨日、会つたばかりだし」

「昨日！？ それなのにあなたは鈴刃ちゃんの仲間として、一緒に行動を共にしているのですか！ 僕なんて、三年間も掛けて、こうして鈴刃ちゃんと仲良くしているというのに……あなたは何て憎たらしい人間なんだ……！」

少年が悔しがっているのか、右手の拳を強く握りながら言った。俺は、視線を鈴刃に向けると、彼女も苦笑いを浮かべていた。

「アレンさん、私と亮介さんは何も無いから大丈夫ですよ。それよりも、テーブルに案内してくれるとありがたいです」

「……はッ！ すみません、こちらのテーブルにご案内します」

しかし、鈴刃の一言でアレンと呼ばれる少年は我に返つたようで、俺たちを一番右端にあるテーブルに案内してくれた。俺と鈴刃は向かい合ひのように椅子に座ると、メニューを開いて何を頼むか考え始めた。

「お、案外安いんだな。心配して損した」

「そうです。この店は、とても安いのに味も確かなんです。亮介さんは、いつか是非ここを紹介したいと思ってましたが、丁度良く

時間が出来てよかったです

「でもな、こここの料理つてあまり分からんのだよな。とつあえず、ホットケーキを頼むか」

俺がメニューの中で唯一分かるホットケーキを注文しようと、鈴刃が意外そうな目で俺のことを見つめてきた。

「へえ、何だか見た田の割には可愛いものを頼むんですね」「まあ、元から少食だつたし、金に余裕も無いからな」

俺はメニューを閉じて言った。そして、テーブルの端に置いてある呼び鈴を持つて、それをチリンチリンと鳴らした。すると、すぐにアレンがテーブルまで駆けつけてきた。

「(注文は何にしてますか?)」

アレンは何故か口角を少しひくひくと震わせていた。ビリヤー、彼は俺にあまり良い印象を持つていないうだ。

「それじゃ、俺はホットケーキとコーヒーを。お前は何か頼むか?」「じゃあ、私はコーヒーを

俺たちの注文をアレンが書き終えると、彼は確認のため一度それを繰り返し言つてから、少々お待ちくださいと厨房に入った。

「なんなんだあいつは? 何だか、俺はあいつに嫌われているようだが」

「まあ、アレンさんはああいつ性格だから。あまり、気にしなくていいと思うよ」

「そうか? それならいいんだが……」

俺は暇なので、メニューと一緒に置いてあつた新聞紙を広げた。そして、俺は最初に兵士募集の広告を見つけた。勿論、この世界は完全に平和なわけではない。この国も、近頃他国と戦争を起こすようで、そのための兵士を募集しているようだ。

「兵士募集の広告ですか……。亮介さんは興味あるんですか？ 確か、魔法兵も募集してたと思うのですが」

「俺は命が惜しいからな。みすみす自分から命を無駄にするようなことはしない」

「命が惜しいって……魔王を倒したいと考えてる人間の言ひことですか」

「何を言つてるんだ？ 俺は魔王を倒すんだ。命を捨てるこことなんてしまいだ」

俺がきつぱり魔王を倒すと言つてのけると、鈴刃はそんな俺の顔を見つめてクスッと笑つた。

「やうですよね。流石、亮介さんです」

俺は何がおかしいのか、少し首を傾げると、丁度良くアレンがホットケーキとコーヒー二つを運んできた。

「お待たせいたしました。ホットケーキとコーヒーでござります」

俺と鈴刃はそれ適当に感謝をしながら、運ばれたものを受け取つた。俺はまずホットケーキをナイフで半分に切つて、更にもう半分に切つた。ケーキは三枚重なつていたが、その中の一番上のケーキにフォークを刺して、それを口の中に運んだ。

「……うん、中々美味しい

ホットケーキの生地はとても軟らかく、そこにバターと蜂蜜がうまく絡んでいて、とても美味しい。しかし、俺に物をゆっくり味わうような穏やかな性格は備わってなかつたので、さっさとケーキを平らげてしまつた。そして、その生地をコーヒーで流し込んだ。

「本当にそれだけで足りるんですか？」

「ああ、十分だ。あまりたくさん食べても戦闘で動きづらくなるからな」

「亮介さんは魔法使いでしょうか？」

俺たちが向き合つて談笑していると、その後ろで完全に顔を引き攣らせながらこっちを見るアレンがいた。そこで、俺は確信を持つた。この男は鈴刃に気があると。

しかし、俺はそういう人のプライベートを弄るのは好きではないので、別に確信を持つたからといって俺にとつてはどうでもいいことだった。

第十一話 刀

「それにしてもあなたはこれから鈴刃ちゃんと何処へ行くつもりなのでしょうか？」

まるで口角を釣り針で引っ掛けられたように、不自然な笑みを浮かべているアレンが俺に尋ねた。俺はその表情があまりにも面白かったので、クスッと軽く笑ってしまった。

「今からギルドに頼まれた依頼をこなしてくんだよ。リザードマンの討伐だけだ」

「リザードマン？　まさか、あなた洞窟のリザードマンを倒しに行くんですか？」

アレンの表情が真剣なものに変わる。俺は、その表情の変化を見た途端、僅かながら違和感を覚えた。恐らく、今の反応だと彼はリザードマンのことを知っている確立が高い。そこで、いきなり真剣な表情で聞いてくるということは、もしかしたらその魔物が危ないということを示しているのかもしれない。

俺が額から汗を流しながらアレンのことを見つめていると、彼は突然大笑いし始めた。

「ハハハッ！　鈴刃ちゃんの実力なら、リザードマン如き何匹掛かるうが余裕ですよ！　まさか、あなたは鈴刃ちゃんにそんなレベルの低い依頼で満足してもらおうと思っているのですか！？」

俺は啞然として、勢いよく椅子からずつこけた。鈴刃もアレンのテンションについていくことが出来ず、椅子に座ったまま気抜けしていた。

俺はこめかみに十字を浮かべながら、アレンのことを睨んだ。そのままいつそ殴つてやるつかと思ったが、出入り禁止にされると面倒くさいので堪えた。

「まあ、『冗談はさて置いて、洞窟のリザーブマンは群れのボスだと聞いたことがあります。入る時は細心の注意を払うべきですね。鈴刃ちゃんに怪我をさせたら承知しませんよ』

すると、アレンは今度こそ真面目な話を切り出してきた。鈴刃だけではなく、俺も彼のテンションについていくことは出来なかつたが、とりあえず分かつたとだけ返事をしておいた。

「本当に承知しませんからね……？」

俺が立ち上がりたところで、アレンは念を押すように顔を近づけて強調してきた。俺はいきなりのことに対し肩を震わせて、思わず手を上げていた。俺の右手ビンタが彼の左頬にクリーンヒットした。

「……あなたは痴漢に遭つた女性ですか」

アレンは殴れた方の頬を擦りながら、涙目で俺に突っ込みを入れた。俺は違う、と一言で答えると、勘定だけ済ませてそそくさと店を出た。

「一体、なんなんだよ、あの男は」

「あの人はずがこの世界に初めて来た時に、最初に出会つた人です。言葉が喋れない私に必死になつて言葉を教えてくれたり、料理をご馳走したりしてくれました。ちょっと変な人んですけど、とても優しくて面白い人ですよ」

鈴刃は苦笑いは解けないものの、アレンがこの異世界で初めて会つた人間だということを教えてくれた。まあ、俺にとつてジジイが感謝する人であるように、彼女にとつてアレンという人物は大事な人間なのだろう。

「まあ、いい。それより、早く洞窟を田指そつ

「それもそうですね。今度、ちゃんとアレンさんを紹介してあげますよ」

俺たちはそれから數十分歩き、とうとう北の門を潜り抜けて草原へ出た。俺たちの目の前に広がるのは、広大な土地と住み渡る碧空と連なる山々だった。

俺たちが目指すのはそこから更に北西にある洞窟。

「そういえばお前って、刀を使うんだったよな」

「……？ そうですけど、何か？」

正直、成り行きで連れて来てしまつたが、俺はこの女がどれくらい戦えるのか不思議に思つていた。刀に関しては素人程の知識しか持ち合わせていないが、かなりの技量と熟練が必要だとぐらいは分かる。だが、この世界に来て三年の鈴刃が本当に刀を使えるのだろうか。

俺が疑問に満ちた目で彼女を見ていると、それに気づいたのか鈴刃が不満そうな表情を浮かべた。

「まさか、本当に私が使える人間なのか考えてませんでした？」

「ま、まさか……そんなわけないだろ」

「いいですよ！ ジャあ、ちゃんと証明してあげますから」

そう言つて、鈴刃は手前一〇〇メートル程先にいるウルフを指差

した。すると、彼女は次にペットの鳥を呼ぶように口笛を鳴らした。勿論、それでウルフは俺たちの存在に気づき、車が走るような勢いでこちらに向かってきた。

彼女はそれを何もしないでじっと見ている。

ウルフはたつた数秒で鈴刃の近くまでやってきて、そして思い切り跳んだ。そこで、鈴刃はキッと目を見開き、とうとう刀を抜いた。その瞬間、彼女の振りから曲線状の何かが現れた。それは、目に止まらぬ速さで、ウルフの丁度顔を切り裂いた。獣の身体が縦に真つ二つに割れる。そして、軟らかいものが地面に落ちる音がした。俺は、驚きのあまり言葉を失った。俺が見た曲線の何か、あれは魔法によって放たれたものに違いない。

「驚きましたか？ 私はこれでも、何時かは忘れましたが昔から続く剣術の名家の生まれなのです。そして、更に風魔法も使うことが出来る、所謂魔法剣士なのです」

鈴刃は元からあまり無い胸を張って、自慢するみたいに堂々と言つた。そして、血で染まることがなかつた刀をゆっくりと鞘にしまつた。

第十一話 モスキート

「それにしても鎌鼬のような技だったな……あれなら何でも切断できるんじゃないのか？」

「それは、技を使う人間と相手によります。今回のリザードマンにはこれが通用するかは分かりません」

鈴刃はこちらを向くことなく言った。それでも俺は彼女の力に恐怖さえ感じていた。

実を言つと、ここにいるウルフは村の周辺にいたものとは比較にならないほど強いのだ。それは、ウルフの毛の色などを見れば分かる。村周辺にいたものは茶色の毛だったが、真つ二つにされたウルフは深緑色の毛を持つている。これは、マナをどれだけ吸収したかによつて変わるらしい。

つまり、鈴刃はそのウルフをいつも簡単に殺してしまったのだ。

「さあ、そろそろ洞窟に着くはずですから、準備をしておいてください」

「分かつて。お前こそ、実力は知れたが、あまり無茶はするなよ」「お気遣い感謝します」

俺たちが街を出てから数十分が経つた頃、とうとう目的の洞窟らしき穴を発見した。そこは、思わず見上げてしまふほどの切り立つた崖の壁に開いていた。中は非常に暗く、奥の様子を伺ひきせ出来ない。

俺は、これといって灯りとつものを持っていなかつたので、やはり杖の先に火を点けて中を照らすようにした。

洞窟は、サッカーゴールを横のままで運べるほどの幅はあつた。俺は、その中央を辺りの魔物に気をつけながら進んでいく。

その途中で、俺は天井に三つの大きな目を持った蝙蝠がぶら下がつて、いつも通り細長い竜のような炎を放つた。

蝙蝠は大きな目を三つとも見開きながら、炎に包まれて地面に落ちた。

「あら、どんな魔物にでも遠慮はしないんですね」

「無抵抗としても、どんな危険があるかは分からぬからな」

俺は火が消えてしまったので、もう一度同じように火を点すと、鈴刃の言葉に答えた。基本的に俺は、全く関係の無い位置にいる魔物以外は倒すようにしている。真下を通りかかったところで、いきなり蝙蝠に飛びつかれたら堪らないからだ。

「それにしても、広い洞窟ですね」

「ああ、そうだな。この中からリザードマンを見つけるのは大変そうだ」

「前にも説明しましたが、あの魔物は僅かながら知性を持つています。ぐれぐれも気をつけてください」

俺が地球にいた頃にハマっていたRPGには、リザードマンはよく剣と盾を持って現れてきたことを覚えている。それは、奴に知性があつて武器を使うことが出来るからだ。ただでさえ、表面の皮膚は硬いというのに、弱点である心臓周辺を盾で守られたりしたら、奴を倒す難易度は一気に上昇するだろう。

少しづくと、俺たちは分かれ道へと辿り着いた。

「これ……どっちに進めばいいんだ?」

「えっと、左側の道の壁に爪で付けられたような傷がありますよ。もしかしたら、これはリザードマンが付けたものなのではないでし

よ
う
か
？

「なら、左に進めばいいのか？」

「どちらかに進まない限りは、何時間もじりじりで目的が出てくるのを待つことになります。左に進みましょう」

俺は鈴刃に言われるまま、左の道に進む事にした。確かに、こっちの壁には夥しい程の傷が付けられている。これは、何かの生き物が故意的にやつたものとしか思えない。

洞窟の中は身が凍える程寒い。出来ることなら、早くここから抜け出したかったのだが、鈴刃の予想は見事に外れてしまった。

左側の道はそのまま一本道で、俺たちは丸いドーム状の部屋に着いた。その奥には続く道が存在せず、この部屋で行き止まりのようだ。しかし、リザードマンらしき魔物の姿は見られない。

「やっぱいんじやないか、あれ……リザードマンより凶暴そうだぞ」「確かに……ちょっと不味い事になりましたね」

確かにリザードマンはこの部屋にはいなかつたが、代わりに一匹の巨大な虫がいた。その形は夏になるとよく出てくる蚊のそれに似ている。しかし、そのサイズは一階建ての平凡な一軒家くらいはありそうだ。

更に、口吻の先からは血のよくな赤い液体が滴っている。恐らく、この部屋に間違って来てしまって、奴の餌食になってしまった人間やその他の魔物のものだろう。

「ふざけんなよ、あんなのに刺されたら一溜まりもないぞ！」

「落ち着いてください。あの大きさだったら、この部屋から抜け出すことは不可能です。なら、私たちが先にこの部屋から抜け出せば、あれが追ってくることは出来ません」

「なるほど、ならば奴の隙を縫つて、一気に部屋を抜け出すぞ」

だが、俺たちの考えた作戦は、早くも崩れ去ってしまった。何故なら、奴の口吻から放たれた衝撃波のようなものが壁にぶつかり、落ちた岩石が唯一の道を塞いでしまったからだ。

俺はいきなりの攻撃に驚いて、思わず前の方に飛び込んでしまった。結果、この部屋から抜け出すことが出来なくなってしまった。鈴刃もどうやら同じ境遇に立ってしまったようだ。

「これはもう、戦うしかないのか……」

「そのようですね。でも、リザードマンを倒すなら、一匹の蚊くらい潰せなくてどうするんです?」

そういうて鈴刃は刀を抜いた。さつきと同じ空氣の刃が、巨大な蚊に向かって放たれる。

しかし、その攻撃は奴にはまるで効かなかつた。鈴刃はまるで、自信を損なわれたように口を開けて絶句した。

俺は自分の杖を奴の顔に向ける。そして、そこに向けて俺は炎を放つた。しかし、蚊はさつきと同じ衝撃波を出して、俺の炎を無効化した。

「クッ！ あれはマナの衝撃波か！」

「あれは、伊達にマナを過剰吸収してませんよ！ そういう分はマナは尽きないと私は思います！」

鈴刃が我に返つたように叫んだ。

魔物はさつきのウルフの時に説明したように、マナをどれだけ多く吸収したかによって、その強さも比例して変わる。普通、蚊が魔物化したのならば、最高でも人くらいの大きさになれば充分なほどだ。それにも関わらず、奴の大きさはその何倍何十倍もある。

俺は、初めて魔物相手に殺されるかもしれないという危機感を覚

えた。そして、それを示すかのように、俺の額から汗が滝のよくながれ

量の汗が噴き出でてくるのであった。

第十二話 脚力

巨大蚊は恐らく血に飢えている。その口吻からは血が滴っているにも関わらず、まだ潤いが足りていないようだ。

そして、その蚊が持つ一枚の羽が揺れ、そこから奇妙な音が鳴り響いた。単純な音の大きさだけではなく、脳の奥底にまで入ってくるようなしつこい音だ。俺と鈴刃は必死になつて耳を塞ぐ。もし、このまま直接聴き続ければ、脳の組織が壊れてしまいそうだ。俺は、集中を保てないながらも、巨大蚊に向けて炎を放つた。すると、奴は衝撃波で炎を無効化する代わりに、何とか嫌な羽音は治まった。

「これはヤバいぞ……まだ耳がキーンとする」

「早めにアレの弱点を見つけないとけませんね……しかし、風も炎も効かないとなると、どうすれば良いのでしょうか……？」

考えている間にも、巨大蚊はこちらに向かつて衝撃波を撃つてきた。

「聖なる神の吐息よ、我が身を護る盾となれ！」

それに逸早く気づいた鈴刃は、両手を組んで呪文を唱えた。すると、彼女の周りから緑色の魔法陣のようなものが現れ、二人と衝撃波の間に見えない壁が作られた。衝撃波は、その壁に威力を失くされて消えた。

今のように、まだ熟練されていない魔法には呪文を唱える必要がある。更に、呪文を唱えた後は魔法陣が出てきたりして、かなり時間が掛かる。その隙を縫われたら、一巻の終わりだ。

俺は鈴刃に軽く感謝をすると、自らも杖を奴に向けて呪文を唱え

た。

「火の神、カグツチの怒りの劫火は、一つの畳を焼き払う。今、我にその力を与え、己の怒りを抑え給え！ 加具土命之怒号ー！」

俺が呪文を唱え終えると、自分の周りが赤く光っていることに気が付いた。魔法陣が展開されている証拠だ。そして、その陣が一層輝きを増したかと思うと、杖から今までの炎とは比較するのも失礼なくらい強力で巨大な炎が出現した。その勢いで、俺の身体が思い切り後ろに倒れそうになつたくらいだ。

だが、これ程の威力ならば、手応えも充分にある筈だ。俺は期待をしながら、その炎が消えるのを待つた（魔法なので、本物の炎より早く消える）。

しかし、その炎が消えると同時に、俺は崩れ落ちるように地面に膝を付いた。

巨大蚊には、僅かたりとも損傷の痕が見られなかつた。

「何でだ……！ 何故、奴に攻撃が効かないんだ！？」

「……？ ちょっと待つてください、亮介君、あの蚊の周辺をよく見てください！」

「え…………？」

俺は鈴刃に言つことを聞いて、蚊の周辺を観察してみることにした。すると、俺は驚愕すべき事実に気が付いた。

巨大蚊の周囲には、僅かだが青白く光るマナの防御壁が展開されていた。

つまり、今まで俺たちの攻撃は、全てあの壁に阻まれていたといふことだ。

「あれじゅ……もつ、攻撃のしようが無いじゃないか……マナの展

開を解除する方法なんて知らないぞ……」

「いや、マナの壁だつたら、物理的な攻撃は防げない筈です。私が

刀でアレの首を落とすしかなさそうですね」

「なるほど。だが、奴に近づくのは至難の技だぞ？　あまり、無茶はするな」

「分かりました」

鈴刃にそう言い聞かせると、俺は杖を巨大蚊より少し上の壁の部分に向け炎を放つた。すると、上手く奴の意識が炎の方に向いたようだ。そのうちに、鈴刃が奴の身体に向かつて走り始める。そのスピードは、地球にいた頃の俺よりも全然速かつた。まるで、チーターが牙を向けて駆けているかのようだつた。

鈴刃は急に方向をずらして、壁の方へ走つた。そして、その壁をまるで重力を無視するかのように一つの脚で上り始めた。

「あれは……人間の出来る業じやないな……」

俺はそんな鈴刃の運動能力を見て、尊敬や驚愕を通り越して呆れの感情すら芽生えさせた。

当の鈴刃は、丁度良い高さまで上ると、そこから壁を蹴つて蚊の本体を掛け跳んだ。そして、彼女は刀を抜いて、空中で一振りした。

鈴刃はそのまま地面に落下したが、ちゃんと着地をしたようだ。そして、そこから時間差でもう一つ巨大な物体が落下した。言つまでもなく、それは蚊の頭だった。

「何とか、倒せてよかったです。それでは、出口を塞ぐ岩を取り除きましょうか」

そう言つと、鈴刃はもう一度刀を横に振つた。そこから、風魔法

で出現したカッターが岩に衝突し、まるで爆弾が爆発したかのよう
な衝撃が生れた。そして、彼女はそこから更に何連続も風の刃を
放つ。すると、何回目かは分からないが、道を塞いでいた岩は完全
に取り除かれた。

「ハハ……凄いね……」

「そう言つてもらえると嬉しいです」

鈴刃は片手で口を押さえながら上品な笑い方をすると、刀を鞘に
戻してさつきの分岐点に行こうと歩き始めるのだった。

第十四話 過去

三つの道の分かれ目である分岐点に俺たちは再び戻ってきた。洞窟は依然、魔物は少なく静かで、逆にそれが洞の不気味さを際立たせている。

「それじゃ、まだ行つてないこっちの道に向かひづぞ」「分かりました。それでは、いきましょ」

鈴刃は俺の一歩前を歩くように、まだ行つてない最後の道を辿り始めた。俺は女の子に先を歩かれるのが何だか恥ずかしかったので、そそくさと彼女の前を歩き始めた。

「亮介君、前方に蛇の魔物の姿が見えます」「分かつた。俺が始末するよ」

鈴刃に教えられて、俺は数十メートル先に蛇型の魔物がいることに気がついた。蛇型は隙を取られると、丸呑みにされる可能性もある。しかし、奴は炎系の魔法に弱く、倒すことが出来なくとも、火を見ただけで何処かへ逃げるだろう。

俺は杖を魔物に向けた。そして、無言のまま杖の先から細長い火の竜を出現させた。それは、上手く蛇の身体に直撃し、燃え盛る業火が炭に変えるまで蛇の身体を包み込んだ。

俺がその蛇の上を歩く頃には、蛇の身体は黒く焦げていて、鼻につく焦臭さが気になつた。だが、こうすることで正確に魔物を倒すことが出来るので非常に楽だ。

「素晴らしい魔法です。尊敬しちゃいますね」「褒めるなら、まずその棒読みをやめろ」

実際、俺の魔法が蛇の魔物を一発で倒す力があるうが、鈴刃の腕には敵いそうもない。さっきの蚊との戦いで、それを嫌な程思い知らされた。ここに来たのが一年早かつただけ、と悔っていたが、今思つと恥ずかしくて穴があつたら入りたい気分だ。

そんな思いで道の上を歩いていると、俺は何か石のようなものに躓いた。転びはしなかつたが、少しでも反応が遅れたら泣きつ面に蜂の状況になつていたに違いない。

そんなところから、俺は若干の苟立ちを混せて、その石のようなものを確認した。しかし、それは決して石などではなかつた。

俺が見た物は、所々に砂を被つた白い球型の物体だつた。そう、人の頭蓋骨だ。

俺は一瞬にして自分の顔が青褪めていくのが分かつた。その頭蓋骨は半分近くが砂に埋まつていて、それなら転んでしまうのも頷ける。

しかし、何故このような場所に人骨があるのだろうか。考え付く答えは一つしかない。

「Jの近くにリザードマンがいるということか

「そのようですね。それでは、ここからは氣を抜かないで、周りの音や振動に全神経を集中させてください」

鈴刃が言つ。俺はゆつくりと頷いた。

俺は手を合わせて、その人骨を弔つた。もしかしたら、これがリザードマンに怪我を負わせた人間なのかもしれない。俺の背中に冷たい汗が溜まつていくのを、自分の皮膚が感じ取つていた。

「それにしても、お前つて冷静過ぎるよな？」

俺は鈴刃に尋ねた。あの巨大な蚊に出くわした時にしろ、彼女の

泰然自若とした姿には不思議に思わずにはいられない。

「私の目的を果たす為には、恐怖の感情などを抱いている場合ではありません」

「目的…………？」

「元の世界に帰つて、私の祖父を殺した犯人に敵を討つことです」

そういうて、彼女はゆっくりと刀を取り出した。そして、銀色に煌めく刀を眺めながら続ける。

「私の祖母は、剣術においては世界中のどの人間にも負けないと聞きました。そして、私は剣術を学ぶ身として、祖父のことを尊敬していました。しかし、祖父は私が生まれる前に殺されてしまったと母から聞きました。だから、私は祖父を殺した犯人に敵を討つため、日々剣の練習をしていました」

「だが突然、この世界に連れて来られてしまつたと」

俺が言つと、鈴刃はこくりと首を振つた。

そして、彼女は斜め上から斜め下へ刀を下ろした。そして、そこから出現した風の衝撃波が、向かう道の奥へ放たれた。

俺はその刀筋を呆然とした表情で見つめていた。すると、奥の方から何かと何かが衝突する凄まじい轟音が聞こえた。俺はその音に一瞬身体を仰け反らせた。

鈴刃は何を考えているのか分からぬ、切なそうな表情で暗闇に閉ざされた道の奥方を数秒間眺めると、ゆっくりと刀を鞘に戻した。

「行きましょう。こんな所で昔のこと思い出しても、何にもなりません」

「あ、ああ。そうだな」

少し進むと、岩で出来た凹凸の激しい地面に、一線の亀裂が出来ていた。恐らく、さつき鈴刃が放った魔法によるものだと考えられる。俺は思わず口を引き攣らせながら、苦笑いを浮かべた。

だが、そんな苦笑を浮かべている暇は、俺にはなかつた。

よく見ると、ここはさつき巨大な蚊がいた場所と同じ、ドーム状の形をした部屋だった。部屋は、謎の青白い光で明るくなつていた。そして、部屋の一一番奥に二メートルはあるう緑色の怪物がいた。

瞳が無く血のように赤く染まつた目、口から溢れる粘々した唾液、完全にリザードマンとしての理性を失つているようだつた。その理由は恐らく、右肩から右腕を切られてしまったことによる痛みと怒りによるものだと思われる。

そして、逆の左手には俺の身体くらいはあるう大剣が握られている。勿論、右手は存在しないので、リザードマンはの大剣を片手だけで持つてゐることになる。

「こりがリザードマンの巣ですか。奴は、非常に繩張り意識の高い魔物ですので気をつけて下さい。理性を失つているようですが、力は著しく上昇していると思われますが、剣の軌道は適当になると見えられます」

「そつか、やれやれ……これは厄介な戦いになるな……」

「本当ですよ、何でこんな依頼を受けたんですか」

俺たちは目線をリザードマンに向けたまま話していくと、奴はけたたましい咆哮を上げると、地鳴りのような音を立てながらこちらに向かつて走つてきた。

第十五話 リザードマン

リザードマンの突進は素早く激しいものだつたが理性を失つてゐる分、まさに猪突猛進というべき単純さだつた。俺と鈴刃は分かれよう左方に逃げた。そしてリザードマンが大剣を一振りする。俺たちは既に逃げていたので、その攻撃が当たる事は無かつたが、元より存在した亀裂に新たな線が上書きされた。

「なんて馬鹿力だ。いつか、大剣が悲鳴を上げるぞ」

俺は呆れたように言いながら、炎を奴に放つた。隙だらけだつたリザードマンの身体に炎が直撃したが、奴は火傷一つ負うことなくもう一度咆哮を上げた。

「リザードマンはどんな岩山や洞窟にも対応出来るように皮膚が硬く作られていますよって、さっきも言つたでしょー。本當なら、奴の右腕が切断されていること自体凄いことなのですよ！」

リザードマンを挟んで、向こう側から鈴刃の声が聞こえた。そういえば、そのようなことを彼女が言つていたのを忘れていた。俺は一度だけ苦笑を浮かべると、今度は奴の心臓に向けて炎を放つた。炎は宇宙空間で物を飛ばすように真っ直ぐと目標へ向かつた。しかし、その炎はリザードマンが持つていた大剣によつて防がれた。理性を失つても、自己防衛能力はちゃんと働いていたようだつた。

「これはちょっと大変だな……動きの素早い鈴刃なら一突き出来そうな気もするが……」

しかし、それを行うには巧く奴の隙を取るしかない。奴は大剣を

まるで片手剣のように扱うことが出来る。いくら剣捌きは雑であっても、もしもの場合を考えなければならない。その場合、あのように大きな剣を回避することは不可能に近い。

俺はもう一度、リザードマンの心臓に向けて炎を放った。その炎はさつきと同じように大剣で防がれた。しかし、同時に鈴刃が奴に向かつて動き出していた。そして、彼女は刀を抜いた。

だが、そこでリザードマンはさつきよりもでかい咆哮を上げた。それに怯んでしまい、俺も鈴刃も攻撃を止めてしまった。まるで、零距離から獅子の雄叫びを聞かされるかのようだった。

「なんて咆哮だよ、鼓膜が破けるかと思つた……」

だが、リザードマンの反撃はそれだけでは終わらない。奴は怯んで動きが止まっている鈴刃に向けて、大剣を下ろそうとしていた。俺は不味い、と三度同じく炎を奴に向けて放つ。奴はそれに気づくと、剣を振り下ろすのを止めた。それと同時に、鈴刃がハツと我に返つたようだった。

「すみません！ 少し怯んでしまいました！」

鈴刃が後ずさりながら、俺に感謝と謝罪の言葉を叫ぶように言った。しかし、奴のあんな咆哮を間近でくらつたら、俺も同じようになんでいただろう。

「しかし、完全に不利な戦いだ。右腕のハンディを抱えているにも関わらず、奴の元からの特性によつて攻撃が制限されている

そこで、俺は新たな魔法を使うことを考えた。ジジイから聞いた、今までの魔法よりも素早く目標に向かうものだ。

俺は確かに記憶に残っている呪文を唱える。

「カグツチの神聖なる炎よ、その自由自在な身体を矢に変えて、光のように宙を駆けよ！」

そして呪文の詠唱が終了し、リザードマンの心臓に向けられている杖の先に魔法陣が現れた。すると、目で確認することも出来ない速さで、何かが奴に向かつて飛んだ。これが、炎の矢と呼ばれる魔法だ。

しかし、その魔法は命中率が悪いらしく、魔法は奴の脚に当たつただけだった。俺は一度舌打ちをした。

リザードマンは急に俺の方へ顔を向けた。俺は何をするんだ、と緊張に額から汗を流しながらも、何が起きてもいいように構えを取ると、奴はその口から炎を吐いてきた。

俺はいきなりのことに驚きながらも、杖を向けて炎の壁を出現させる。この魔法はジジイに何度も叩きこまれており、そこまでレベルの高い魔法ではないので、しつかりと熟練していた。

炎と炎は上手く相殺されて、無力と化した。

「火も吹けるのかよ……なんて野郎だ」

「亮介君！　すぐに私と奴を結ぶ直線から離れてください！」

突然、鈴刃がそう叫んだ。俺は何のことだか分からなかつたが、とにかく言わされた通りに離れることにした。

すると、彼女は静かに呪文の詠唱を始めた。そしてそれが終わると同時に彼女は抜刀した。そこから、まるでギロチンの刃のような風が出現した。その風を実際に目で確認することは出来なかつたが、その軌跡のようなものは見ることができた。風の刃がリザードマンの横腹に衝突する。

「……な、何で！？」

しかし、リザードマンの横腹はほんの僅かな流血しか確認出来なかつた。それには俺も鈴刃も絶句するしかない。

そして、自分の攻撃が効かなかつたが為に動きが止まつてゐる鈴刃を狙つて、リザードマンは火を吹こうと息を吸い始めた。

俺は危ない、と鈴刃に叫ぼうとした。あまりに突然な出来事に、魔法を放つことも出来ない。

「さあ、そこまでですよー。鈴刃けやん、後は僕に任せてくれ下さいー！」

リザードマンが息を吸おうと身体を反らした瞬間を狙つて、一筋の光のような矢が奴の心臓に向けて飛んだ。そして、その矢は巧くリザードマンの左胸に当たる。

俺は矢が放たれた方を向いた。そこには、刀を構えている赤髪の青年がいた。

「あ、あいつは……アレン！」

「あなた、鈴刃ちゃんを危険な目に遭わせたら承知しない、と言いましたよね？ これだから、戦い慣れのしていない人間は困るんです。ほら、見てください、僕の放つた矢によつてあのリザードマンは今頃地面に伏して……」

アレンが自信満々に言つたが、彼の指差す方向には更に機嫌を悪くしたリザードマンがいた。そして、それを見ると同時にアレンの顔が次第と青褪めていく。

「アレンさんっ！ リザードマンの心臓は右側にあるんですよー。」

「そ、そんな……ッ！」

「テメエ！ 格好良く登場するなら、せめて倒せよー。」

俺は思わずアレンに向けて怒鳴っていた。しかし、そんなことをしていてはリザードマンに隙を見せてしまうので、この件は保留にしておくことにした。一応、助けてくれたことには変わりない。リザードマンは再び耳を劈くような咆哮を上げながら、左胸に刺さった矢を抜いた。そして、それを俺に向けて投げてきた。矢はさつきのアレンのものよりは遅かったものの、確実に俺の顔を目掛け飛んできた。

『危ない!』

だが、矢は俺に到達する前に発火して、地面に落下し燃え尽きた。俺は何事だ、とその声がした方を向く。すると、俺がこの世界で一番会いたくない人間が、宙を浮いていたのだった。

『亮介君、怪我はありませんか!? ちょ、あのリザードマン……地獄に落として見せますよ……』

その瞬間、洞窟内の空気が一瞬にして変わった気がした。何と言えばいいのか分からぬが、よく分からない重力が掛かっているかのようだ。そして、それがセレナの怒りの力だとは誰も知る由もない。

『消えなさい、蜥蜴』

セレナが一言呟くと、リザードマンが内側から急に破裂した。頭と手足が四方に吹っ飛び、血の赤色に染まった肉片が飛び散った。俺はその様子を見て、引き攣った笑顔で笑い声を零すことしか出来なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426y/>

ヤンデレ逃避行～逃げた先は異世界～

2011年11月23日19時50分発行